

夏が終わる

加藤文子

八月も最終となると気配は秋。そぼ降る雨もヒンヤリしている。

昨夜からの雨が止まず、今朝は何からはじめようか少し手持ち無沙汰の感じがしていたが、雨の
かからない温室の植物たちの手入れに向かうことにした。

黒リユウに数種のシダが自然参加して共生するひと鉢が目に入る。一週間ほど前にはヒスイ色し
ていた黒リユウの実は、ナスビ色になって光沢を増す。リュウノヒゲの仲間であるが葉色が黒色で
あることから、黒リユウの名が付けられている。

鉢の中で育つ黒リユウを見て、「シックで素敵ネ」と、わが家を訪れたフランス人が言ったのを
思い出す。あるようでないニュアンスの植物。

常緑種で寒さに強く、冬でも姿を保つのでグランドカバーに広く用いられているのだそう。

細長い黒色の葉をぬって見え隠れする実の輝きを鉢の中に見る時、いとおいしいような特別な思い



が湧いてくる。鉢の中、限られた小さな空間だからこそ、なおさら美しいと思うのか。

盛りが過ぎて枯れているシダを整理して、週末のギャラリーで展示したいと思った。陶の作品の並ぶバタフライテーブルの上に……。

温室に近い外棚のコバノズイナや西洋カマツカの葉の数枚は、はやくも染まりはじめた。

山モミジの上方の枝先の葉も、うすく朱がさしている。

先日まで盛んに鮮やかなピンクを放っていたミソハギの花びらは、パサパサになって散っている。

今か今かと開花を待ちわびたタニワタリの木のパフのようなアイボリーの花は、今までに一番たぐさん咲いたのに、あっけなく終わってしまった。この南方の花を、珍しいでしようと、誰かに教えてあげたかった。

それぞれの鉢中に見る末枯れた茎や葉に鉄を入れながら、活気に満ちていた春や初夏を思う。

照りつける太陽の下で乾いて仕方なかった盆栽を追いかけて水やりに明け暮れた毎日が、つい半月前のことだったなんてウソのようだ。汗だくになって途中で着替えながら外仕事をしていた。

スケジュール帳の九月のページの欄外のメモには、寒冷紗を外す、バラ・ボケなど植え替える、置肥、落ち葉掃き、ドライオブジェ制作、年賀状考える、と書いてある。

着るのは今年の夏で最後にしようかと決めていた長年愛用したTシャツや紫色のカーディガン、カットして掃除に使おうと思う。どれもすっかり色が褪せている。カーディガンの紫色の小さな前ボタンは、ラリーキルトのアクセントに使えそうだ。

まるでアームカバーのように見えていた肘上まで日に焼けた両腕は、元の肌色になろうとしている。

庭の影のエリアも拡がって、棚に並ぶ盆栽の風景が違って見える。

蚊取り線香にむせて咳き込んだりした夏の日々が終わる。

季節が進んだ先で、リンドウの射るような紫やゲンノショウコの赤紫が、晩秋の庭の宴に彩りを添えるだろう。



陶と一緒に 黒リュウを飾る